

ゲオルク・ビュヒナー研究 II

— 戯曲「ダントンの死」とビュヒナーの体験について —

梅根栄一

(帯広畜産大学独文学研究室)

Büchners Erlebnis und „Dantons Tod“

von

Eiichi UMENE

ビュヒナーが彼の最初の作品である戯曲「ダントンの死」を脱稿したのは1835年2月20日と推定される。というのは翌21日に彼はダルムシュタット(Darmstadt)の両親の家からフランクフルトのザウエルレンデル(Sauerländer—書店主)宛てとカール・グツコウ(K. Gutzkow)宛てに、つぎのような書簡を同時に送っているからである。

ザウエルレンデル宛て

「拝啓、この手紙と一緒に一つの原稿を貴方にお送りできるのを私は光栄に思っております。これは一つの戯曲的試みでして、近代史のある素材をとりあつかっております。もし貴方がこの戯曲の出版をお引き受け下さるならばその旨を、又反対の場合には原稿を当地のハイエリッシュェ書店宛て返送の旨、できるだけ早くお知らせ願えれば幸いです。もし同封の手紙をカール・グツコウ氏にお渡し下さって戯曲を見るようにお伝え下さるならば誠にありがたいのですが。………」²⁾

グツコウ宛て

「拝啓、各人の考慮を忘れさせ、感情を沈黙させてしまうような非惨な状態が世の中には存在しているということが、恐らく貴方に観察を与え、不幸な状態の中での特殊な経験をもうお知らせしたと思います。………どうかできるだけ早くお読み下さって、批評家としての貴方の良心がこれをお許しになるような場合にはザウエルレンデル氏に薦めて下さるよう、そしてすぐさま御返事下さいますようお願いいたします。………」²⁾

誰れの紹介もなく、また一面識もない両者に対して同時に出されたこの2通の書簡には、ビュヒナーのさし迫った事態がありありとうかがわれる。事実彼は期待通りの返事も金も受けとることなく3月1日にはダルムシュタットを離れている。すなわち彼は逃亡のための金をなんとかこの戯曲によって得たかったのである。ザウエルレンデル宛ての書簡は、単なる出版の依頼にとどまっているが、グツコウ宛てではその弁明が前記の文章の後にすぐ次のように続いている。

「作品そのものについては不幸な事態がせいぜい5週間で書くことを私に強いたというこ

とより他にはなにも申し上げることができません。このようなことを申し上げるのは、ドラマそのものについてではなく、作者に対する貴方の判断を促したかったからなのです。私がそこから何を作りだすべきか、私自身わかりませんが、私は歴史に向い合って顔赤らめるような理由を沢山持っているということだけは知っています。けれども私はシェクスピア以外あらゆる詩人は、歴史と自然の前には小学生のようなものであると考えて自らを慰めています。……」したがって「ダントンの死」が金を作るための手段として書かれたことはなによりもまず明かである。しかしながら「作品そのものについては」せいぜい5週間で書かれたものであり、しかも金を作るためであったとしても、その内容に対する評価は切り離されてなされねばならないであろう。ここでは「ダントンの死」とビュヒナーの体験に関して考察を加えてみたい。

ビュヒナーの書簡をみると、1834年8月終りとなっているギーセンからの両親宛て書簡から、前記引用の1835年2月21日の2通までの間には約6カ月近い空白がある。それ以前はだいたい月に2通ないし3通の書簡を両親に宛てたり、シュトラースブルクにいる許婚ウイヘルミーネ・イエーグレ(Wilhelmine Jaeglé)に宛てて書いている。また35年2月21日の書簡以後も毎月数通の書簡を送っている。勿論この空白の期間は両親の家であったから両親宛ての書簡がないのは当然であるが、イエーグレ宛てには以前に彼の率直な意見を述べていたことから、何かこの間のことを書き送りそうなものだと考えられるが、実際には残っていない。すなわちこの期間は彼の革命運動の最後の時期で、34年8月1日には彼の起草になる「ヘッセンの急使」をその地下印刷所であるオッフエンバッハ(Offenbach)に取りに行った同志の一人、カール・ミンニグローデ(Carl Minnigerode)がギーセン城門前で捕えられ、この事件をきっかけとして彼等の運動が挫折するのである。次第に強化される取り締りの中で、ビュヒナーは東奔西走、身の危険も顧みずさらに革命的活動をつづけ、もう一度「ヘッセンの急使」を出版することに成功する一方、ダルムシュタットで新しい同志を得て、ミンニグローデの救出のために努力する。つまり34年秋から冬にかけてはビュヒナーにとって思索の時期ではなくて、最も活潑な実践的行動の時期として昼夜の別なき状態だったのである。しかも身に迫る当局の捜査は刻一刻とその厳しさを増して活動ができなくなり、両親の家に閉じ込めらざるを得なくなっていたのである。ここにおいて彼は国内における活動を断念する気になり、逃亡を意図し、それに必要な金を作るために「ダントンの死」の完成に没頭する。そこにはイエーグレに宛てて書く暇もなかったであろうし、また書かざるをえない思索上の迷いもなかったと思われる。

「ダントンの死」を書くにいたるまでのビュヒナーの体験は、第1次シュトラースブルク時代から一貫してつづけられてきた革命的政治活動がそのすべてであるといえる。そしてその革命的政治活動の中心は、「ヘッセンの急使」というパンフレットを農民の間に配ることであった。この活動は結果において前述のごとく失敗に終るのであるが、とにかく「ヘッセンの急使」を作ることはできたのである。この間の事情は既述⁹⁾の通りであるが、彼の「ヘッセンの急使」

における根本的な考えは、要するにこれを配布することによって農民に国家形態の現実と、彼等の経済的状態の真の姿を認識せしめ、革命以前の段階としてまず彼等農民を組織化することであったといえよう。「すでに起った革命に参加せず、そしておそらくこれから起るであろうところのどのような革命にも参加しないのは、不同意のためでも、また恐怖のためでもありません。ただ現在の時期にあっては、どんな革命運動も無駄な企てであると見ていますし、ドイツには権利のための闘争に対して、充分用意のできている民衆がいると思っている人達の眩惑を共にしないからです。」⁴⁹と彼は第1次シュトラースブルク時代に両親に宛てて書いているが、この考えを祖国に帰ってからの実践的活動において、すなわち「ヘッセンの急使」を書き、それを流布する行動において押し進めたとみるべきであろう。しかしこの「ヘッセンの急使」も彼の草案通りにでき上ったのではない。同志の中での中心的存在であったヴァイデイヒ (Fr. L. Weidig) によって9カ所、量にして半分近いものが聖書的表現で改訂されている。この事実は明かにヴァイデイヒとビュヒナーの考え方に、大きな根本的な相違があったことを意味している。ヴァイデイヒは、農民の革命化によって政府を倒すという目的においてビュヒナーと一致していたが、その方法としてただ農民を精神的な面からパンフレットによって啓蒙し、宣伝しようと考えていた。だから農民大衆に深くしみこんでいて、彼等の生活の基盤となっていたキリスト教の精神を考えてビュヒナーの草案を聖書的表現で改訂したのである。それではビュヒナーは、そうゆう農民の現実を知らないで草案を起草したのかといえば、そうではなくて、「ドイツには権利のための闘争に対して、充分用意のできている民衆」がいないから、そういう農民の革命化の前の段階として、まず国家の実状、特に経済的な実状を「ヘッセンの急使」によって伝えたかったのであると思う。ここにビュヒナーの真実に対する妥協のない厳しい態度とともに、純粹性をみるのできるのである。

このようなビュヒナーの体験が、それではどのように「ダントンの死」に関係しているであろうか。それについて述べる前に、彼が最初の作品であるこの戯曲の素材をなぜフランス革命から持ってきたのであろうか。そこにはビュヒナーを育てた環境が多分に影響を及ぼしていると思う。というのは彼の革命運動の助力者であり、特に逃亡にあたって彼を助け、家庭にあって彼を一番よく理解していた弟のウィルヘルム・ビュヒナー (Wilhelm Büchner) が、「……なにごとにもよく現われている厳しい性格の持ち主であった父は、元来極度に儉約でした。しかし子供達の発育のために必要なものは惜しみなく与えました。フランス大革命の時代に生きた彼は軍医として、その頃フランスの指揮下にあったオランダ部隊で2・3の戦役に参加しましたが、革命の諸精神の進展に対して最大の同感をもっていました。そして体験した事件を、後に現われた雑誌「現代」(Unsere Zeit) のなかで何度も繰り返し、補うことが彼の一番好きな読書となりました。この雑誌は晩にしばしば朗読されました。そして私達みんなはそれに対して、まことに生き生きとした関心を寄せたのでした。そうでなくても家庭の精神は自由でしたの

で、この朗読の効果は特にゲオルクに異常な影響を与えたようですし、おそらく「ダントンの死」はこの朗読がきっかけとなって成立しているようです。……」⁹⁾と少年時代の家庭の状態を後年、フランチオース⁹⁾の依頼に対して述べていることから明かである。ビュヒナーはこのような家庭の空気の中で育ったが、この環境がたしかに彼に影響を与えたことを証するものに、つぎのようなイェーグレ宛ての書簡がある。「……私はフランス革命の歴史を研究していました。歴史の恐ろしい宿命論のもとに打ちひしがれたように思いました。私は人間性の中に恐るべき同一性を見ましたし、人間の境遇の中に、だれにも与えられない宿命の力を見ました。個人というものは浪の上に浮ぶ泡にすぎません。偉大さとは単なる偶然なのです。立派な天才も人形芝居の人形であって、鉄のごとき法律に対する可笑しい戦いにすぎません。このことを認識することが最上であって、それを思いのままにするなんて不可能なのです。私はもはや歴史の観兵式用の飾り馬や、のらくら者に身を屈めようとは思いません。私は眼が血に慣れてしまいました。でも別に私はギロチンの設計者ではありません。……」⁹⁾ここには研究の結果、フランス革命に対する失望の念が述べられているが、とにかく前記のような環境の中にただ単に育ったというだけでなく、みずから研究を行なったことによって環境に影響されたことは事実である。実際にまた「ダントンの死」の史実は、主として雑誌「現代」によっているのである。このようにビュヒナーが戯曲の素材をフランス革命からとったのは、環境に影響され、さらにフランス革命を研究してみたことと、彼の革命運動における実際の体験によるものと思われる。しかしこの素材に関してルカチは、次のような見解をロシヤの劇作家プーシキンと対立させて述べている。「すなわちドイツとロシヤの歴史の相違からである。ビュヒナーはドイツの歴史の中に、彼の革命的なイデーにぴったりするような劇的な素材を見出さなかったし、またそこには当然素材を見出すことはできなかった。フランス革命の悲劇時代がビュヒナーに、ドイツ革命を観念的に準備するための序論を与えたのである。プーシキンはここにおいてもほかの場合におけると同じように、彼自身の祖国の過去の中に適当な素材を見出すのである。それゆえに彼は王様劇のシェクスピアのように、彼の国民の発展や、国家の苦しみに一つの劇的表現を与えることができるのである。」⁹⁾確かにこの見解は素材に関する一つの見方ではあるが、ドイツの歴史の中にビュヒナーのイデーにぴったりするような素材がないとしても、彼が見出し得なかったと断定できるであろうか。結果として見る場合にはそうであるが、ビュヒナーが見出そうとしたかどうかは彼の言がないので明かではない。してみれば彼の選んだ素材は前記のごとき関係によるとしてよいのではなからうか。すなわちドイツの歴史の中に見出されなかったというよりは、フランス革命に対する関心と、彼の革命運動における体験から必然的に取り上げられた素材であると思うのである。

こうして取り上げられた素材と、革命的活動による体験を経て戯曲「ダントンの死」は完成した。全体の構成は4幕からなっているが、各幕はそれぞれさらに、第1幕6場、第2幕7

場、第3幕10場、第4幕9場というように、全部で32場という非常に多くの場に分れている。そしてこれらの場は次々と交替しながらフランス革命における一時期を美事に浮び上がらせている。その時期は、第1幕第1場でフィリポー (Philippeau) が「今日また20人の犠牲者が出たんだ。俺達はまちがってたよ。エベール派の者達をギロチンにかけてしまったんだ……」⁹⁾ といっているように、エベール派の処刑された1794年3月24日から、ダントンの逮捕され(3月30日)、処刑される4月5日までの10日間である。この期間はモンターニュ派の内部におきた深刻な分派闘争の結果、暴動をくわだてたという理由でエベール派が逮捕、処刑された後で、最後にのこったダントン派とロベスピエール派の葛藤がくりひろげられる時期である。ビュヒナーはこの2派の対立を前記の雑誌「現代」を中心に、ティエール (L. A. Thiers)、およびミニエ (F. A. Mignet) の「フランス革命史」を参考にして書いている。このような史実をもとにして書いた創作の態度を、「ダントンの死」がグツコウの編輯になる雑誌「フェニックス」(Phoenix) によって発表せられ、さまざまな批評や噂が立てられていることに対する解答として次のように両親に宛てて書いている。「——戯曲作家というものは、私の目から見れば歴史家にほかならないのですが、次の点によって歴史家の上位にあります。すなわち戯曲作家は、われわれのために歴史を第二次に創造して、ひからびた話を聞かせる代りに、直接われわれをある時代の実生活の中に移し入れ、性格描写でなくて性格そのものを、描写でなくて形象そのものを与えます。戯曲作家の最後の任務は、事実起ったままの歴史にできるだけ近づくことです。彼の書くものは歴史そのものより道徳的であっても、不道徳的であってもいけないわけです。しかし歴史は神によって若い娘さんのための教科書として造られているものではありませんから、たとえ私の戯曲があまりそうゆうお役に立たなくても私が悪くいわれる筋なんかないわけです。私はダントンという男や、革命のやくざものどもから道徳の英雄を作り出そうなどは思いもしなかったのです。私が彼等の不信心さを示そうと思うと、あったままの無神論者として彼等に語らせなければならなかったのです。行儀のよくない言葉がでてくるというのでしたら、人はあの時代の世界中に有名になっていた猥褻な言葉を思い出すべきでしょう。私の人物の口にてでくる言葉は、そのいうにたりないスケッチにすぎません。そうはいってもまた人は、私がこんな材料を選んだこと自体を非難するでしょう。しかしこの抗議はとうに反駁されています。この非難を妥当とするならば、大部分の詩の傑作は放棄されなければならないでしょう。詩人は修身の教師ではありません。彼は人物を創造し、過去をふたたびよみがえらせるものです。読者は歴史の研究から、あるいは人生において自分たちのまわりに起る事柄の観察から学ぶように、作品の中から学ぶべきです。もし人が欲するなら、非常に多くの不道徳な事柄が物語られている歴史を研究しないでもできますし、猥褻なことを沢山見たくなければ、目隠しして街を歩いてもいいでしょう。さらにこんなに多くの不品行の起るような世界を創造された神様を怒鳴ってもいいでしょう。それでもまだ誰かが私に対して、詩人はこの世

の中をあるがままにではなく、まさにあるべきように示さなければならないと主張するのでしたら、私は次のように答えるでしょう。私は世の中をあるべきように創られたに相違ない神様より良くしようとは思いません。なおあのいわゆる理想主義詩人についていいますと、彼は青い鼻をした、つくりものの感情をもった人形は作れるでしょうが、肉のあり、血の通った人間を表現して、その悲しみ、喜びに人を同感させ、その行為によって人に嫌悪か、あるいは賞賛を覚えさせることはないでしょう。一言で申しますと、私はゲーテ、あるいはシェクスピアは大いに重んじますが、シラーは殆んどかえりみません。……」¹⁴⁹ この書簡の中に彼の「ダントンの死」に対する考えと、それをさらに進めた一般的な文学観のすべてが集約されている。このような考えと史実にもとづいて「ダントンの死」は書かれているが、それがただ単に「ひからびた史実の羅列に終わらないで、史実をたどりながらそこに「肉のあり、血の通った人間を表現」しているところにこの戯曲の価値がある。この時期のダントンが寛容政策を主張して革命を終らせようとしていたことは、「人を殺すというのは正当防衛がなくなってはじめて起るのだ。僕はこれ以上われわれに人殺しを強いる根拠がわからないよ。」¹⁵⁰ と作中において語らせ、「廉潔の人」といわれたロベスピエールが革命の徹底的遂行を主張したことは、そのまま「社会革命はまだ終わっちゃいない。革命を中途半端で終らせるものは、われとわが墓穴を掘るものだ。」¹⁵¹ と語らせている。そしてそのダントンには「われわれは始終芝居をやっているんだ。どうせ最後はどうにもならず殺されるんだ。」¹⁵² というようにペシミスティッシュな性格が与えられ、ロベスピエールには「おれのカミーユよ！——奴らはみんなおれから離れていく——なにかもかも荒涼としていてうつろだ——おれは一人ぼっちだ。」¹⁵³ といわせることによって孤独な性格が与えられている。つまり革命における対立の底に、人間としての葛藤が裏付けられているのである。しかもこれをさらに悲劇的に強く押し進めていく力として大衆を登場させている。ダントンとロベスピエール、そしてこの2人をとりまく革命家達も最後は大衆によって規定されていく。ここに「フランス革命の歴史を研究し」、「歴史の恐い宿命論に打ちひしがれ」、「人間性の中に恐るべき同一性を見」、「個人というものは浪の上に浮ぶ泡にすぎません」と述べたビュヒナーの姿を見るのである。

かくして「ダントンの死」に対するビュヒナーの体験はどうなるのか。「ビュヒナーはヘッセンにおけるかれの非合法的宣伝活動の短い時期に、こうした諸問題をば、その理論的並びに実践的な全範囲にわたって体験したのである。」¹⁵⁴ とルカチはいつている。すなわちビュヒナーの深い体験から生れた作品としているのである。たしかに「貧乏人と金持との関係が、現代における唯一の革命的要素なのです。」¹⁵⁵ というビュヒナーが、「ヘッセンの急使」においてなそうとした農民の経済的認識は、そのまま「ダントンの死」の中で物質的窮乏にあえぐ大衆に置きかえることができるし、その救済は同じように見放されている。しかしかかる大衆の登場も、彼等がまた史実の通りに存在したのであり、これをビュヒナーがその深く傾倒するシ

エクスピアの技法にならって戯曲の技巧の一つとして表現したと見ることはできないであろうか。すなわち、あくまで「ダントンの死」は史実をもとにし、書簡に述べた戯曲作家の認識の上に立つ創造であるとするのである。すなわち「ヘッセンの急使」において、どうしたら農民を経済的に解放できるかということにより、どうしてそのような物質的に悲惨な状態にあるのかという事実を農民に認識せしめようとしたと同じように、「ダントンの死」においても大衆の経済的な救出法ではなくて、革命の進展にもかかわらず貧しくなければならない彼等そのものを現わしているのである。したがって体験からとするよりも、体験に対すると同じ場において、すなわち、革命家としてよりもなによりもまず詩人としてのビュヒナーの鋭い感覚がヘッセンにおける革命運動の根底となり、彼をして戯曲「ダントンの死」に向かわしめていると思うのである。

<注>

- 1) Georg Büchner Werke und Briefe, Insel-Verlag, 1953, S. 222. Brief an Sauerländer Darmstadt, den 21, Februar 1835.
- 2) ibid. S. 223. Brief an Gutzkow Darmstadt, den 21, Februar 1835.
- 3) 梅根栄一, 「ゲオルク・ビュヒナー研究 I」, 帯広畜産大学学術研究報告, 別巻, 第3号.
- 4) Werke S. 204. Brief an Familie Straßburg, den 5, April 1833.
- 5) ibid. S. 285. Wilhelm Büchner an Franzos Pfungstadt, den 23. Dezember 1878.
- 6) Karl Emil Franzos 1879年にフランクフルトのザウエルレンデル書店より「ゲオルク・ビュヒナーの作品, ならびに遺稿, 最初の批判的全集版」を出版した。
- 7) Werke S. 208. Brief an die Braut Gießen.
- 8) G. Lukács, Der russische Realismus in der Weltliteratur, Aufbau-Verlag, Berlin 1953, S. 55.
- 9) Werke S. 10.
- 10) ibid. S. 231. Briefe an die Familie Straßburg den 28. Juli 1835.
- 11) ibid. S. 27.
- 12) ibid. S. 27.
- 13) ibid. S. 34.
- 14) ibid. S. 32.
- 15) G. ルカーチ, 道家忠道, 小場瀬卓三訳「ドイツ文学小史」, 岩波現代叢書, 92頁.
- 16) Werke S. 229 Briefe an Gutzkow Straßburg, 1835.

<主要参考文献>

- 1) Georg Büchner, Werke und Briefe, Insel-Verlag, 1953.
- 2) Georg Büchner, Gesammelte Werke, Artemis-Verlag, Zürich 1344.
- 3) G. Lukács, Der russische Realismus in der Weltliteratur, Aufbau-Verlag, Berlin 1953.
- 4) G. Lukács, Deutsche Realisten des 19. Jahrhunderts, Aufbau-Verlag, Berlin 1953.
- 5) G. Lukács, Der historische Roman, Aufbau-Verlag, Berlin 1955.
- 6) Hans Mayer, Büchners ästhetische Anschauungen, in: „Studien zur deutschen Literaturgeschichte“, Ruetten-Loening, Berlin 1955.
- 7) Ludwig Büttner, Georg Büchner, Hans Carl Verlag Nürnberg 1948.
- 8) G. ルカーチ, 道家忠道, 小場瀬卓三訳「ドイツ文学小史」, 岩波現代叢書版.
- 9) 河野健二, 「フランス革命小史」, 岩波新書版.